



写-129 昨年と今年の 2 回被害に遭っている



写-130 シラビソ-コメツガ林の林床



写-131 1600m付近から西沢渡を望む

6 上河内岳周辺地域（聖平小屋から茶臼小屋）

聖平から南岳、上河内を経て茶臼小屋と続く稜線の登山道を中心に調査した。

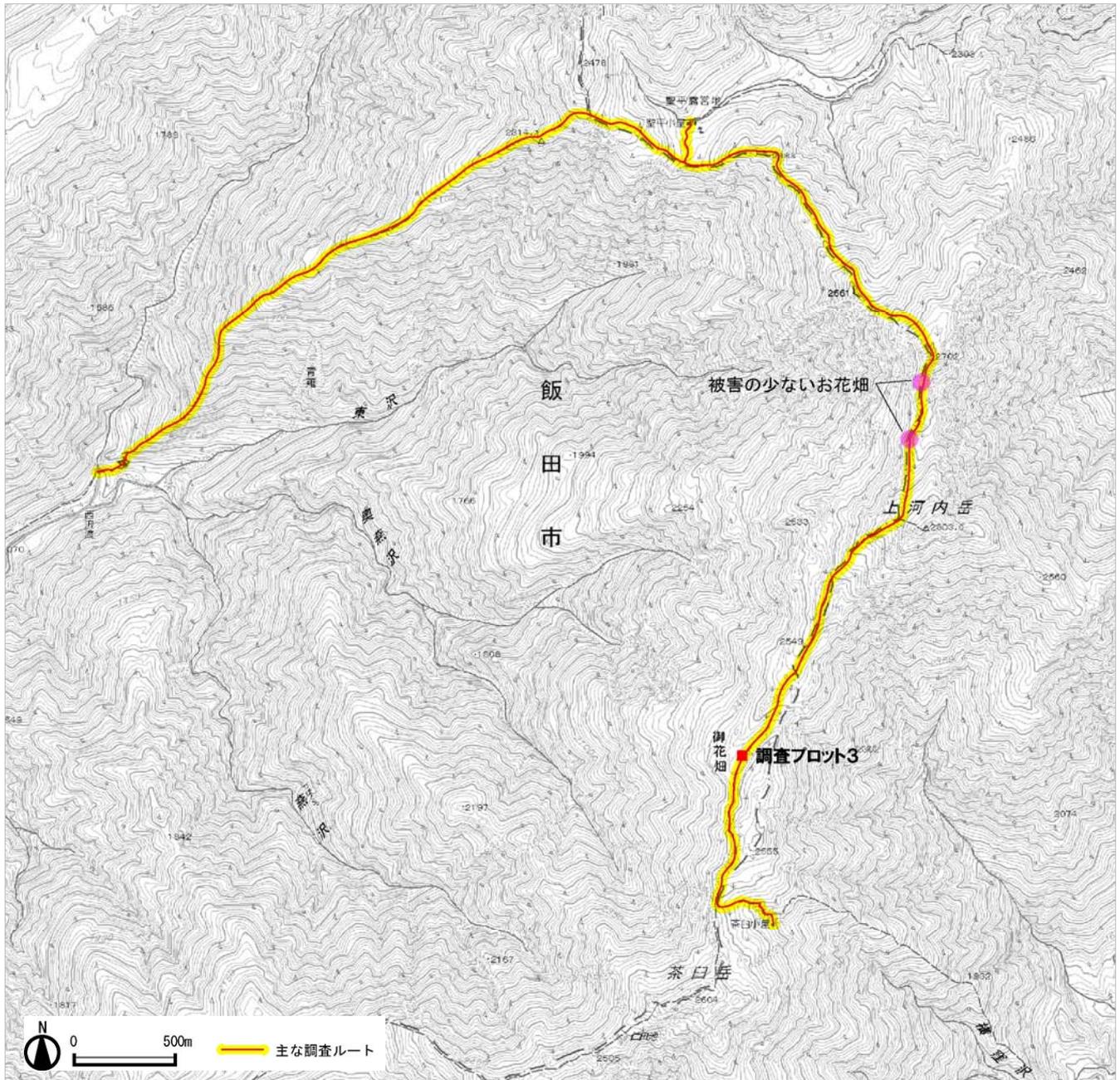


図-9 調査位置図 6(聖平から茶臼小屋)

(1) 聖平から南岳

聖平は、以前ニッコウキスゲを始めとするお花畑として楽しまれていたが、現状はシカの強い食圧により牧草地化した単純な草原に変貌している。現在もシカが出没し草原内には採餌痕やフンがあちこちで確認できる。シカは、南岳に続く登山道も利用しており、登山道からシカ道が数多く枝分かれしている。分岐先には草原やダケカンバの疎林がある。

前述の薊畑から西沢渡に下る登山道に比べシカが通っている形跡が強いのは、餌場となる草原やダケカンバ林が多く分布しているためと考えられる。しかし、明らかな食痕の形跡は草原、

低木とも古いものも多く、新しい形跡は比較的少ないことから最近の食圧のかかり方は低いと推測される。例えば、ウラジロナナカマドやタカネナナカマド、コヨウラクツツジなどは、以前は枝先まで食べられていたが、今回の確認では葉の部分を摘み食い程度と軽いものである。

草本では、カラフトメンマやイワノガリヤスが地上 30cm 程度から上を食べている痕跡が多い。これまでの調査で、食圧が高くなると 10cm 程度の高さまで食べていることから、最近の食圧は低い状況にあると推測される。

以上、聖平から南岳に至る間の登山道沿いでは、植生の相観が大きく変質していることから数年前までシカの被害が相当広範囲に及んでいたと考えられ、被害状況を B と判断した。なお、シラビソ林にはクマの剥皮被害が見られる。



写-132 南岳から上河内岳の稜線に広がる草原



写-133 シカの嫌う植物が残る聖平の草原



写-134 以前食害され、頂端に辛うじて開葉したウラジロナナカマド



写-135 コヨウラクツツジの古い食害痕



写-136 タカネナナカマドの葉の食痕



写-137 カラフトメンマの食害痕



写-138 イワノガリヤスの葉の上部に食痕



写-139 南岳山頂

(2) 南岳から上河内岳を経て茶臼小屋

南岳を下り急な斜面にでるとシナノオトギリ、タカネマツムシソウ、タカネコウリンカ、ホソバトリカブト、ミヤマシシウド、タイツリオウギ、ヤマホタルブクロ、ヒロハウスユキソウ、タカネコンギク、ヒメムカシヨモギなどからなるお花畑が出現する。このように花を咲かせた高茎草本の草原はこれまで少なく、今では貴重な草原であるが、これが本来の南アルプスの植生である。これより先、上河内岳の間には、アオノツガザクラ、チングルマ、ヒメスゲ、イトキンスゲ、ネバリノギラン、クロユリ、ムカゴトラノオ、ミヤマダイコンソウなどからなる雪田草原が二重山稜の緩い傾斜地に見られる。何れも地域ともシカの痕跡は確認されたものの、その程度は少なく、植生への影響も殆んどない。

上河内岳から茶臼岳に連なる稜線には、二重山稜があり雪田草原が出現する。中でも、二重山稜の中にある「お花畑」の看板付近やその先の亀甲状土の草原は規模が大きい。さらに進むとダケカンバを交えた草原が出現する。これらの草原は、これまでのシカの被害地と同様に食害の形跡があり、草原の様相はバイケイソウやトリカブトが散在する単純な草原であったり、牧草地状態であったりと被害後の植生状況を呈しているが、確認されたこれらの被害は、何れも数年前からの積み重ねで生じた現象と見られる。そこで、ここに植生調査のためのプロットを設定した。

以上から、南岳～上河内岳間及び上河内岳周辺(概ね標高 2700m以上)は D、これより先茶臼岳と茶臼小屋の分岐点手前までは植生相観等から判断し被害ランク A~B とした。

なお、茶臼小屋周辺は、他の山小屋同様ダケカンバや草原に囲まれた状況にあり、その植生状態は以前に食害に遭ったと思われる様相を呈している。ただし、今年に関しては全般に草丈が伸びており、最近のシカの食害は少ないと推測される。特に、小屋の周りについてはミヤマシシウドを始めシカの嗜好性の高い植物が花を咲かせるなど食害の様子は感じられないが、小屋から 50m程離れると、すでにマルバダケブキなどに変わるなど被害が出ている(写-150)。



写-140 ミヤマシシウド、ホソバトリカブト等の咲く草原



写-141 タカネマツムシソウ、タイツリオウギなどが咲く



写-142 効ネテシ、効ネツムシウ、ヤマホタルブクなど



写-143 雪田草原の状況



写-144 雪田草原に咲くアオノツガザクラ



写-145 上河内岳山頂の調査員



写-146 亀甲状土に広がる草原



写-147 ダケカンバ林下の古い食害



写-148 茶臼小屋の周辺状況



写-149 茶臼小屋の前に咲くミヤサキド
(小屋近くは被害がない)



写-150 小屋から離れると被害が出ている

7 茶臼岳、易老岳、光岳周辺地域（茶臼小屋から光小屋）

茶臼岳から仁田岳を経て易老岳、光岳と続く稜線の登山道を中心に調査した。

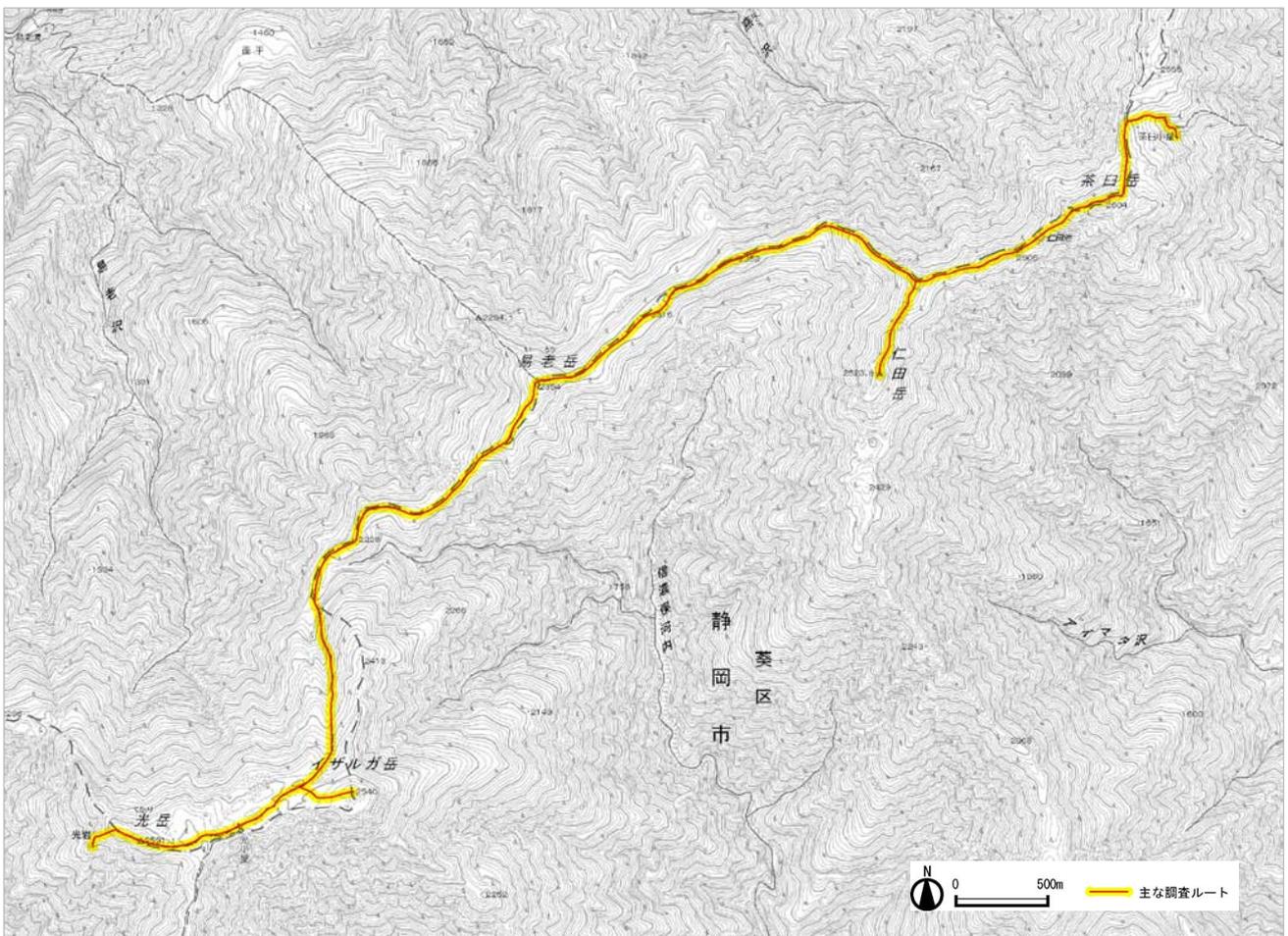


図-10 調査位置図7(茶臼岳から光岳)

(1) 茶臼岳から易老岳

茶臼岳分岐から茶臼岳山頂を経て稜線を下り、二重山稜に至るまではシカの痕跡はあまり多くない。二重山稜を進むと仁田池がある。仁田池周辺は傾斜が緩く、低灌木と草原からなりシカの食害痕跡が多く見られ、草原は刈り込まれた状態で食圧が高かったことが分かる。低灌木

はウラジロナナカマドやダケカンバで1.5m程度以下の枝の多くが食害を受けている。しかし、ここでも最近の食痕、糞などの生息痕はそれほど多い状況にはない。

さらに進むとシラビソ林に変わり仁田岳との分岐点である希望峰に着く。この一帯では、シラビソの稚幼樹にシカによる古い剥皮痕が多く見られ、一部には枯損木も発生している。しかし、新しい剥皮の被害は殆んどなく林床に糞が散見される程度である。なお、ここから仁田岳へはハイマツ林の中を通過して到達する。ハイマツ林を通過する間に、シカの食害等は確認されなかったが、山頂付近においてライチョウ3羽を目撃した(写-157)。

希望峰と易老岳の間にはシラビソ林が続くが、緩く幅のある尾根筋には草原が出現したり、ギャップが出来ていたり様々で、開けた草原の場所ではシカの痕跡が容易に観察される(写-158)。しかし、これまでの調査ルート同様、数年前までは被害が相当激しかった様に推測されるが、最近の食圧や植生被害はあまり目立たない状況にある。

なお、易老岳に近いシラビソ林では、クマの皮剥ぎ跡や爪跡などの痕跡が見られた。

以上から、茶臼岳、仁田岳山頂周辺の被害ランクはD、縦走路の登山道沿いでは水場や緩傾斜の広い草原がある局所的な場所ではA、その他の概ねB~Cに区分した。



写-151 茶臼岳から下る尾根より仁田池を望む



写-152 仁田池周辺の食害状況



写-153 仁田池周辺のダケカンバ被害



写-154 仁田池周辺の草原の被害



写-155 希望峰の林内状況



写-156 仁田岳の状況



写-157 仁田岳のライチョウ (3羽)



写-158 登山道沿いのシラビソ低木の剥皮



写-159 登山道沿いのシラネワラビと水溜り



写-160 クマによる剥被被害



写-161 食圧により刈り込み状態の草地



写-162 一斉に葉を枯らしたバイケイソウ
(昆虫(幼虫)による葉の食害)



写-163 クマのツメ跡



写-164 易老岳近くのシラビソ林

(2) 易老岳から光岳

易老岳の登山道分岐から三吉平の間は、シラビソ林と開けた草原、倒木更新地など様々な変化を繰り返す。それぞれの地域でシカの食害を確認することができるが、その痕跡は古いものが多い。最近の足跡、糞、食痕なども確認されるが、その頻度は少なく、シラビソ林やシラビソの更新地に影響を与えるほどの食害には至っていない。しかし、草原部分については、採餌場として以前から頻繁に利用されていたと推測され、南アルプスにおける本来の種構成、草丈などは食圧により様変わりしている。食圧は低いものの今も時々採食されている状況が確認されることから、単純化した草原はそのまま、以前の状態に回復する様子は感じられない。

三吉平を過ぎると静高平まで涸れ沢に沿って直登する。沢沿いは、浸食や雪触により草地や矮性化した低木林からなり、シカの餌場となっている(写-170)。やはり食痕は古い形跡が目立ち、最近の食害痕はあまり見られない。食圧が強い場合、一般にディアラインが形成されることが多いが、この地域ではそこまで至っていない。静高平では、たび重なるシカの食圧より刈り込まれた状況にあり、バイケイソウが点在し、ヒメスゲが地表を覆い、ハクサンフウロは草丈 10cm 程で花を咲かせている(写-174)。

センジガ原からイザルガ岳、光岳間は、二重山稜の緩斜地に草原、ダケカンバ林、ハイマツ林が広がり、ハイマツ林以外にはシカの痕跡、食害が見られる。調査の際には、写-179 の場所に夜間シカが出没したのを目撃した。

光小屋から東側（静岡県側）に下った場所に水量豊富な水場がある。水源施設付近は、草地となっているが、ここでもシカの被害が確認できた(写-180)。ダケカンバ林にはディアラインができマルバダケブキ、ホソバトリカブト等のシカの嫌いな植物が目立つ。

また、光岩は、石灰岩のため希少植物も生育しているが、周辺にシカの移動形跡を確認した。光岩の下方の岩鍾や 2 つの岩の周辺では、ホソバトリカブト、タカネコウリンカ、バイケイソウ、マルバダケブキなどが目立っており、シカの被害が進んでいることがわかる(写-183)。

以上から、易老岳、イザルガ岳、光岳の各山頂周辺では被害ランクは低く C~D とし、登山道沿いではシカの痕跡が容易に確認できたことから B、場所によっては A と判断した。なお、草原の被害は以前からの蓄積の結果であるが、現時点では回復に至る状況にはない。



写-165 易老岳山頂



写-166 易老岳周辺のシラビソ林



写-167 シラビソ林内のクマの皮剥ぎ



写-168 バイケイソウの食害、頂部に食痕



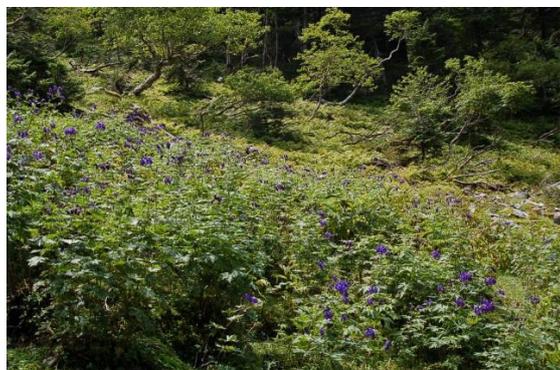
写-169 シラビソの更新状況



写-170 涸れ沢の右岸斜面の草原



写-171 草本と低木の混在する斜面



写-172 涸れ沢の傾斜の緩い斜面



写-173 静高平の草原



写-174 静高平周辺の刈り込み状態の草原



写-175 稜線に近い草原



写-176 ハイマツ林の中の草原、奥ダケカンバ



写-177 ダケカンバ林の林床



写-178 センジガ原



写-179 光小屋周辺の草地(手前は食害)



写-180 岩水場付近の被害地



写-181 光岳山頂



写-182 光岩周辺はダケカンバ帯



写-183 光岩周辺の被害地

8 光岳、加加森山、池口岳周辺地域（光小屋から池ノ口）

光岳から加加森山を経て池口岳と続く稜線及び池口岳から黒薙に下る登山道沿いを調査した。



図-11 調査位置図8(光岳から池ノ口)

(1) 光岳から加加森山

光岳から加加森山に至る登山道は稜線沿いを通っている。この間は、主にシラビソの樹林帯を通過するが、二重山稜や緩い尾根筋には草原が分布する。

樹林帯では低木やシラビソの稚幼樹に古い食害痕が散見されるが、最近のシカの被害痕跡は殆んど見られない。草原部においては採食跡やシカ道など生息痕が見られる。また、樹林帯ではクマの皮剥ぎ被害が見られ、皮剥ぎは、ごく最近のものから古いものまで様々であることから、以前からこの地域に生息しているものと思われる。

このため、シカの被害ランクを決めるに当たっては、これまでの被害を想定し、樹林帯においてはC、草原が広がりシカの嫌う植物が優占している場合は食圧を受けていると判断しBとした。



写-184 光石と池口岳方面の分岐



写- 185 二重山稜に見られる草原
(ホソバトリカブト、キオンが優占する草地)



写-186 シラネワラビ型に変わった草原



写-187 シラビソ林の状況



写-188 クマの皮剥ぎ



写-189 加加森山山頂(左)及びその周辺(右)



(2) 加加森山から池口岳経由黒薙

加加森山山頂は、亜高山植生で林内照度が少なく、食物となる植物がないため食害は見られない。

加加森山から池口岳に向けてシラビソ林の中を南下すると緩傾斜の広い尾根が現われる。ここは風倒被害地でシラビソの更新地や立枯れ木が多く、更新途中の区域や草地、樹林の明るい区域などいろいろなタイプの林相が分布する。このように明るい森林区域ではシカの痕跡が容易に確認される。しかし、これまでの調査地同様、新しい痕跡は少ないように感じられる。さらに進むと長野県側に大規模な荒廃地が出現する。植生が侵入し安定してきた浸食斜面にはシカ道が通っており、このような場所でも移動経路として利用していることが確認された。

池口岳へは、さらにシラビソ林の中を進むことになるが、樹林帯の中ではシカの痕跡は少なくなる。池口岳北斜面のダルマ沢源頭部では、シカによる食害を受け、イネ科草本やマルバダケブキに変わっている(写-195)。

池口岳の直下まで来ると、ミヤコザサが初めて出現する。他の地域の例では、ミヤコザサはシカの嗜好植物とされているが、他に食物がない場合に食害に及ぶものと考えられ、ここでも食痕が確認された。ササの竿の高さが全体的に低い傾向にあることから、以前から採餌されていたものと推測される。また、鶏冠山にはササ地が見られ、シカにとっては格好の餌場であると推察される(写-199)。

池口岳から池口岳南峰の間もシカの痕跡は同様に確認された。

池口岳と池口集落間を連絡する登山道は、高低差にして 400m程の急な尾根道を一気に下る。この間シラビソやコメツガの樹林帯を通るためシカの痕跡はあまり感じない。その後平坦となるが、樹林帯の中にあってはシカの被害はあまり見られない。森林生態系保護地域の西端は民有林と境を成し、保護林内はシラビソ林でシカの被害は殆んど目立たない。民有林側は成長の良いダケカンバ林で林床には草本が繁茂している状況でシカの生息痕跡が多く確認される。

これより黒薙までは民有地境を通るが、クマの糞や爪跡が沢山確認されるようになる。

以上から、加加森山から池口岳の間では、樹林帯で急な地形下ではシカの被害は少なく C~D、緩い尾根筋等で草原を伴う区域ではシカの出現が多くなり植生被害に結びつくと推察されることから B とした。また、池口岳から池口集落に下る登山道沿いの樹林帯では C~D とした。



写-190 シラビソの更新状況



写-191 風倒木被害地